

2015年限定本数発売
“ブルースパークル”



※本広告に印刷された商品の
※本広告に記載された「サイ
ヤマハ株式会社の登録商標で

「子どもの頃から歌やダンスが好きだったので、母が何をやらせたらいいか相談したかったようです。大きなグランドピアノが置いてあつてすぐに寄つていったのですが、とても背が足りなくて鍵盤まで届かない。それを見た先生がヴァイオリンを薦めてくれたのです」

めきめきと才能を発揮し、すぐにコンサートのステージに立つようになった。「小さい頃から人前で演奏することは好きでした。ステージに上がる瞬間の気持ち、あとは演奏する時間……言葉に表せないくらい幸せを感じます」

母親は音楽家ではないが、娘のために様々なことを学び、現在でも一般的な学校と音楽学校の二つに通うのがヨーロッパでもロシアでも普通だが、上級へ進む時に、母娘は「モスクワへ出た方がより能力を伸ばせる」と決断した。英才教育で知られるグネーシン音楽学校へ入学。そこで師となるアレクサンドル・ヴィニツキに会った。

「音楽家として教師として素晴らしい人。両方を兼ね備えた方は少ないですが、その稀な方です。人間的にも魅力的で、音楽以外のことも相談に乗ってくださるし、ご自分の経験も話される。旅先での出来事や出会った人のこと。とても興味深いことばかりです」

自分で決めたコンクール出場 レパートリーの集中的勉強

「コンクールの受験は先生方はけっして歓迎はしていないのです」とサフキナ。「どのコンクールもレパートリーが似ているため、勉強に集中する時期に成長を妨げるからと言います。ヴィニツキ先生は反対はしない。しかし自主性に任せ、アドヴァイスをくれます」

仙台コンクールの参加を決めた理由の一つに、前述した「プログラムの面白さ」があつたという。「他のコンクールとは全く似ていない。次回もシューマンの協奏曲などがありますね。オーケストラと一緒にこの素敵

ヴァニツキ先生の希望者は多く、入れたのは幸運だと語る。

「この曲を演奏して、この曲を弾いて、素晴らしいと思います」とサフキナ。

実際の第5回仙台国際音楽コンクールの感想を聞いてみると、「生まれて初めて指揮者の無い室内オーケストラと一緒に演奏できたことは面白かった」と挙げてくれた。次に「シマノフスキを弾けたこと」以前から演奏してみたいと思つていたが機会がなかったのだという。そして「素晴らしい音楽を作る仙台フィルハーモニー管弦楽団と一緒に弾くことができましたこと、これが最も印象に残っています」

現在モスクワ音楽院に在学中の3年生だ。5年制の音楽学校で、希望すればさらに2年間、音楽院附属の大学院に進学できる。「ヨーロッパの学校より勉強する時

間は長いですがね」と言う。今後のプランを尋ねると、「現在は、モーツァルト、J・S・バッハ、シマノフスキ、ショスタコーヴィチにとっても興味があるので、協奏曲とソナタを全曲演奏したい。あとは各国の現代作曲家にも興味があるんです。日本、韓国……ですから同国人で20世紀の人であるショスタコーヴィチには特に惹かれますね」しかし、「一番好きな作曲家は「もちろんチャイコフスキー」だ。自分が内側から何かを感じる、だから好き」と語る。

様々な指揮者、色々なオーケストラに出会いたいというサフキナ。幅広い曲を演奏したいから曲の発掘もしていきたいと考えているという。そして、コンクールへの挑戦は、まだ少しの間、続きそうだ。



第5回仙台国際音楽コンクールのファイナルでは、ブラームスの協奏曲を堂々と演奏、聴衆の人気をさらった(2013年6月2日、日立システムズホール 写真提供/仙台国際音楽コンクール事務局)

【コンクール情報】

■第6回仙台国際音楽コンクール ヴァイオリン部門
日時/2016年5月21日～6月5日
会場/日立システムズホール仙台
審査委員長/堀米ゆづ子(日本)
審査副委員長/堀正文(日本)、ロドニー・フレンド(イギリス)
審査委員/ボリス・ベルキン(ベルギー)、マウリシオ・フックス(カナダ)、ホアン・モンラ(中国)、加藤知子(日本/予選、セミファイナル)、ヤンウク・キム(USA)、ギドン・クレーメル(ラトビア/ファイナル) チョーリヤン・リン(USA)、レジス・パスキエ(フランス)、竹澤恭子(日本)
オーケストラ/山形交響楽団(予選)、仙台フィルハーモニー管弦楽団(予選・セミファイナル・ファイナル)
指揮者/予選は指揮者無し、ヴァイオリン部門: 広上淳一
《問》仙台国際音楽コンクール事務局 022-727-1872 詳細 <http://simc.jp/simc/compe/>
◇申込締切/2015年11月16日(月)

仙台国際音楽コンクールに向けて・1

ロシアの妖精、仙台に！ 確かな技術と人間力で聴衆を魅了

SENDAI
INTERNATIONAL
MUSIC
COMPETITION

コンクールには、優勝をかけての戦いのほかに、数々のドラマが生まれる瞬間がある。また聴衆の心を捉える光を放つ演奏家やその卵たちに出会うこともある。だからこそ、多くの可能性を求めて、コンクールを追う人々もいるのだろう。

第5回仙台国際音楽コンクールで第4位入賞に輝いたロシアの新星、アンナ・サフキナもそういった魅力的な演奏家の一人。仙台の人々の心を捉え、この8月にアマチュアオーケストラとの協奏曲の共演、またミニコンサートが行われた。



Anna Savkina

1994年ブラーツク(ロシア)生まれ。5歳からヴァイオリンを始め、現在はモスクワ音楽院にてアレクサンドル・ヴィニツキー氏に師事。多くのコンクールに入賞し、ソリストとしてロシア・ナショナル・フィルハーモニー管弦楽団(ウラディー・スビヴァコフ指揮)をはじめ多くのオーケストラと共演。世界各地でソロ・コンサートツアーを行っている。



機嫌を上げ、浴衣を着てご機嫌

コンクールには積極的 様々な出会いがあるから

アンナ・サフキナは現在21歳(取材時は20歳)。昨今、コンクールの是非には議論があるが、彼女自身は「コンクールに参加することは、準備も含めてとても好き」だという。「多くのコンサートの機会が得られること、そしてレパートリーを集中して学べること、またオーケストラと一緒に演奏できること」にメリットを感じていると語る。特に仙台国際音楽コンクールに関しては、「まずはプログラムが素晴らしかった。ファイナルの課題曲がブラームスだったことは興味深かった。そして同じコンクールの中で3回もオーケストラと一緒に演奏できることはめったにないチャンスです。日本に来て演奏することがで

き、その中で入賞できて、自分のことをとてもラッキーだと思います」

ロシアのシベリア地方で生まれた育ったサフキナは、「日本が大好き」だ。「来たことがなかった日本に行くチャンスとも思いました。実際に来てみて日本を知り、帰ってからもますます好きになってずっと日本のことを思い出していました」

だから彼女はこの8月の来日をとっても喜んでいる。ちょうど仙台七夕の最中。コンクールの運営ボランティアの人々の手で浴衣を着つけてもらったお祭りにも顔を出して、「とても幸せ」だと言う。

ある日訪ねた音楽学校で 才能を見出され、モスクワへ

小柄で愛嬌のある美女、サフキナだが、演奏に甘さは無い。まだまだ発展の余地はあるものの、確かなテクニックと表現力で聴かせる。聴衆を圧倒し、自分の音楽に巻き込み、ますますファンを増やしている。

今回の来日では、宮城教育大学交響楽団の定期演奏会に客演してチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲を演奏。また20回目のコンクール・ボランティヤが運営、250名を招待するミニコンサートに出演。演奏とトークで交流を深めた。シベリウスの小品やバガニニー、モーツァルト、そしてチャイコフスキーの《なつかしい土地の思い出》《ワルツ》《スケルツォ》などを演奏した。